

備前福岡 長船の古代中世を訪ねる旅



〔福岡の市〕



〔福岡の市跡〕



〔福岡城跡〕（県指定郷土記念物）

備前史探訪の会 歴史民俗研究部会 2000年9月17日

「備前福岡・長船の古代・中世を訪ねる旅」予定表

福山駅北口集合	7:45	
福山駅北口発	7:55	
福山東IC	8:10	
吉備サービスエリア着	8:45	(トイレ休憩)
吉備サービスエリア発	8:55	
山陽IC着	9:05	
東平島交差点	9:15	
備前福岡城着	9:30	(淡染一揆蜂起の地でもある)
備前福岡城発	9:55	
備前長船博物館着	10:05	(トイレ)
備前長船博物館発	10:35	
備前福岡郷土館着	10:50	
備前福岡郷土館発	11:10	
福岡の市跡着	11:15	
妙興寺		
黒田家墓所		(この間は徒歩で散策)
宇喜多興家墓所		
七つ井戸		
福岡一文字記念碑	12:00	
備前福岡公民館着	12:05	(昼食)
備前福岡公民館発	12:50	(出発前にトイレをすます)
備前福岡駐車場発	12:55	
服部麿寺跡着	13:05	
花光寺山古墳		(この間は徒歩で移動)
新庄天神山古墳	13:50	
服部麿寺跡発	13:55	
丸山古墳下着	14:05	(バス内から見学)
丸山古墳下発	14:10	
須恵古代館着	14:30	(トイレ)
須恵古代館発	14:15	
築山古墳着	14:20	
築山古墳発	14:40	
備前焼美術館駐車場着	15:05	
備前焼産業会館着	15:10	(トイレ休憩)
備前焼産業会館発	15:30	
備前南大塚跡着	15:40	
備前南大塚跡発	15:55	
真光寺着	16:05	
真光寺発	16:30	
備前IC着	16:40	
吉備サービスエリア着	17:00	(トイレ休憩)
吉備サービスエリア発	17:15	
福山東IC着	17:50	
福山駅北口着	18:10	

○はじめに 備前福岡の年譜

- 承元2 1208 この頃、後鳥羽上皇の御番鍛冶に選ばれた者の大半は福岡の刀匠だった。福岡一文字派の隆盛期。
- 弘安元 1278 一遍上人が「福岡の市」で説法をする。
- 正中2 1325 福岡庄が東寺領となる。
- 観応元 1350 足利尊氏、直冬を鎮圧のため西下し福岡へ40日滞在する
- 応安4 1371 九州探題として備前福岡を通過した今川了俊が紀行文に福岡の繁栄を記す。
- 応永10 1403 教意山妙興寺創建される。
- 長祿 1458 赤松氏の旧家臣が南朝から神璽を奪い北朝へ奉還する。
恩賞として赤松次郎法師(嘉吉の乱・1441の首謀者赤松満佑の弟の孫)が赦免され、加賀半国と備前国の新田庄(現備前市、和気町南部)などを賜る。
- 寛正元 1460 新田庄の赤松氏と福岡に拠る山名氏が戦いを繰り返し、赤松氏の勢力が増す。
- 13 1463 赤松次郎法師は元服し、赤松政則と名乗る。
- 応仁元 1467 応仁の乱が起こる。
赤松氏、福岡城を攻撃し山名氏の家臣小嶋大和守は美作へ逃れる。
その後、赤松氏は備前の他播磨・美作も領国に回復する。
- 文明15 1483 赤松・浦上軍と、山名・松田軍が福岡城をめぐる攻防を続ける。
17
- 大永3 1523 近江国伊香郡黒田庄より備前福岡へ移住していた黒田高政が死去。2年後に重隆と孫の職隆は播州・小寺氏のもとへ。
- 天文5 1536 宇喜多興家が死去。これより前、興家、直家は福岡の阿部善定に寄宿。
- 天正元 1573 宇喜多直家が岡山城主となり福岡の商人を城下へ移住させる
- 19 1591 吉井川の大洪水により福岡の町が流失する。
- 慶長5 1600 黒田長政は筑前52万石に封ぜられ、居城を福岡城と命名。
- 正保2 1645 刈屋城主・池田輝興が備前福岡に幽閉となる。
- 寛文4 1664 福岡が上道郡から邑久郡に編入される。

(1) 福岡城跡

吉井川の河原のゴルフ場内にある稻荷山、または中島山と呼ばれる丘が城跡と言われている。ただし、その左岸、岡山市寺山にある丘陵が城山と呼ばれていること、及び当時の吉井川は本城の西にも流れ、城山は中州であったことからこちらが当時の城跡ではなかったかとも推定できる。

建武年間(1334-38)は赤松氏の配下であった。その後、足利幕府内の騒乱が起こり、観応元年(1350)11月、足利尊氏は中国探題として韃に滞在した足利直冬追討の途中、中国・四国の諸勢の集合を待ちながら備前福岡へ40日滞在した際、この城を本陣とした。この時、尊氏は弘法寺(牛窓町)に戦勝祈願を込めている。その間、弟の直義は南朝に帰順し尊氏追討の兵を上げたため、尊氏は急ぎ兵庫まで帰った。直義は尊氏と和解するが、鎌倉において毒殺される一。

時代は下って、嘉吉元年(1441)6代将軍足利義教を殺害した赤松満佑を追討した山名教之は、福岡城に小嶋(こじま)大和守をおいて守らせ、この時福岡城は要害として整備された。文明元年(1469)赤松満佑の弟の孫である赤松政則は、応仁の乱の最中、京都から備前に戻り、浦上・松田氏など旧臣と共に福岡城を攻撃し奪回した。

その後、赤松氏と山名氏は備前、播磨、美作国内で攻防を続けた。この頃赤松政則は侍所の所司であったが、播磨・小塩城に在国し、浦上則宗は在京し所司代を勤めた。そのため松田元隆は備前国の政事をすべて取り仕切っていた。文明15年(1483)赤松政則は、居城を富山城から金川城に移した松田氏の改易を計ったが、松田氏は金川城の要害を固め、備後の山名氏に応援を求めた。

山名政豊(備前軍記によれば嫡子山名俊豊)は9月に備後の国分寺を出陣し、翌年初頭にかけて松田氏、庄氏などと共に福岡城を包囲し、6千騎(松田勢1800、備中勢1300、山名勢3000)が赤松・浦上軍を攻めた。山名氏の陣は吉井川右岸の火鉢城、現在の大日幡山(おおひなたやま)と比定されている。福岡城は吉井川の中州の丘に櫓を築き、塀を巡らせ、大軍がこもれるよう城域に民家1千余を取り込んで、外には三重の堀を設けて野武士を配置し守りを堅固にしていたという。

これより前、文明15年暮れに赤松政則は播磨の真弓峠で山名政豊と戦い敗北し播磨の小塩城から脱出し摂津に逃れた。そのため、京から福岡へ

救援に向かった浦上則宗など国人衆の離反にあい、福岡城の2千余の守備隊は分裂、離散した。こうして文明16年以降、播磨・美作・備前は山名氏の勢力下となる。

九代将軍義政の仲介により和解した赤松・浦上軍は文明17年(1485)からが再度、福岡城を攻撃。この時、浦上則宗は余慶寺(邑久町)に戦勝を祈願している。また、播磨でも山名氏との攻防が続いた。この頃、山名氏の国人が離反の動きをみせ、山名政豊は播磨から但馬に撤退するに及んで、福岡城からの兵も引き、代わって浦上氏が入城した。

後、大永年間(1521-28)の大洪水により廃城となったという。

【淡染一揆結集の地】

安政2年(1855)岡山藩は財政立て直しの一貫として、29カ条の儉約令を発令した。その中の「別段御触書」は、被差別部落民を対象とした法令であり、部落民のきものは淡染め・藍染めに限る、雨天の下駄はきも禁止などの厳しい差別があった。部落民は嘆願書を藩に提出したが受け入れられなかったため、安政3年6月13日に八日市河原(現長船町八日市=福岡城跡)に数千人が結集し、家老の陣屋を目指した。3日間の対峙の末、首謀者12人は捕らえられたが、御触書は空文化させることができた。

(2) 福岡市と市跡

鎌倉・室町時代に備前国福岡庄の吉井川流域に形成されていた市場。当地は福岡庄、香登庄、北部の美作国の特産物や伊部焼(備前焼)などの主要な流通路であった。「一遍上人絵伝」の「福岡市の段」に、一遍の福岡市遍歴である弘安元年(1278)当時の、市の様子が描かれている。それによれば、道路の両側に数棟の掘立小屋が建ち並び、米、魚、備前焼きの壺、足駄、布、鳥などが売られている。店頭では銭を数える女性もみられる。この頃(鎌倉中期)から売買手段に物から銭が使用されるようになった。

背後には広大な水田、前には数筋の水路と物資を運送する船が描かれている。福岡市は吉井川の中州に存在した市であったと推定できる。この時代は3斎市(8日、18日、28日など月に3日開く市)であった。

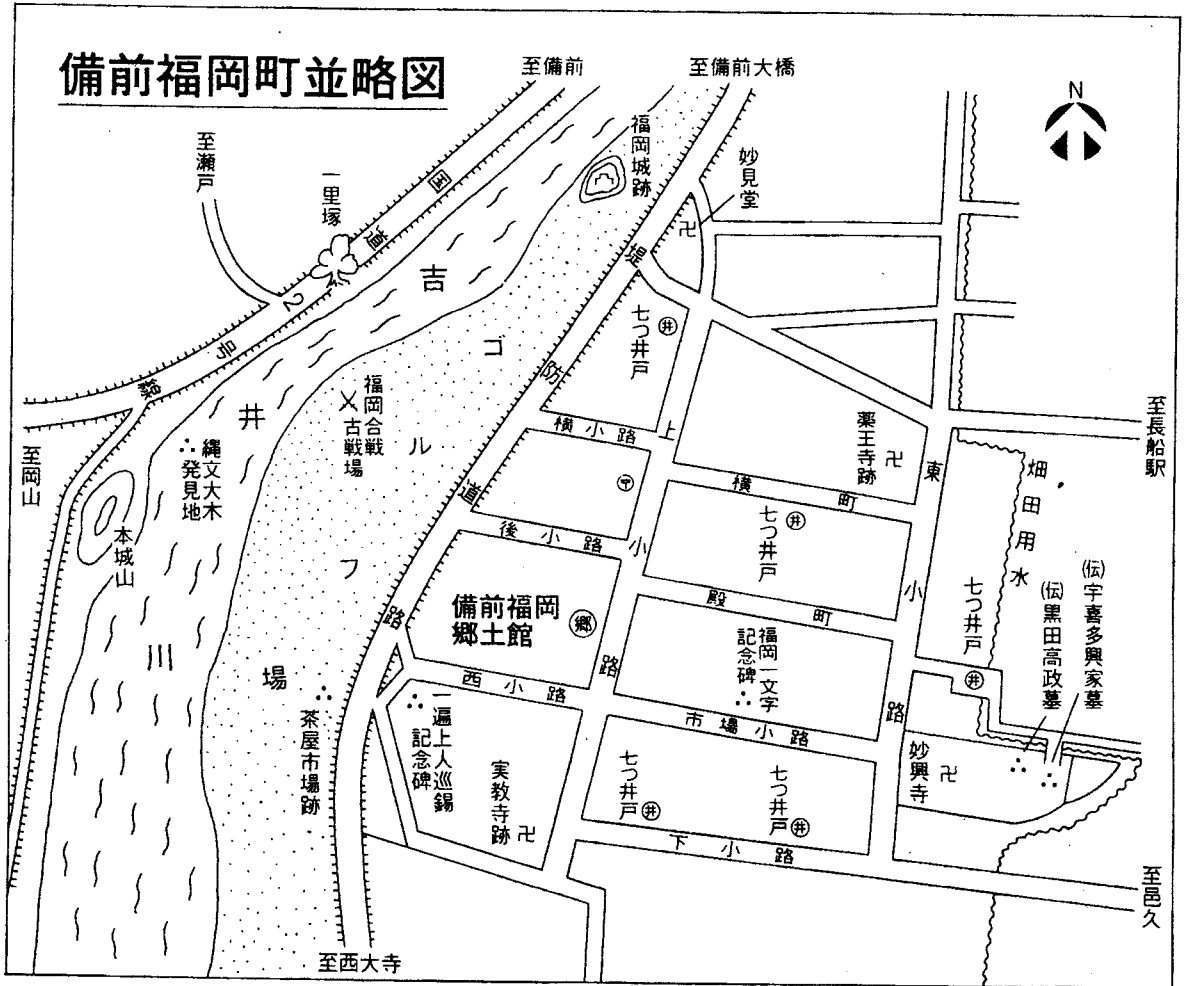
当時の文献(福岡荘吉井村畠目録案)(吉井村領家年貢難濟庶子等注文)に見られる吉井村内の「下市」や「茶屋市」「八日市」などの市を総称して「福岡市」と呼んだと思われる。山陽道と吉井川を利用した交通の要所であったことから、定期市から常設市へと発展し、「福岡千軒」と言われる山陽道きっての商都として繁栄した。

応安4年(1371)に今川了俊が九州探題として下行の際、この地を通った

ときの紀行文「道ゆきぶり」には「山の尾ごしの松のひまより海すこしきらきらとみえておもしろく、其日はふく岡につきぬ、家ども軒をならべて民のかまどにぎはひつゝ、まことに名にしおひたり」と記されてある。

戦国末期、宇喜多直家による現在の岡山城下町が形成される過程において、福岡の多くの商人も岡山へ移転した。現在の岡山市表町は「福岡」と呼ばれていた時期があった。その後、天正19年（1591）の大洪水によりかつての福岡市は壊滅的な被害をこうむった。

「備前福岡名所町、七口、七つ井戸、七小路」といい伝わっている通り、上小路・下小路・西小路・後小路・市場小路・殿町・横町などの路地が、碁盤の目のように交差し往時をしのぼせる。当時の田舎町にしては広い道路は、江戸時代に整備された。正保2年（1645）赤穂刈屋城主・池田輝興が妻（黒田長政の娘）を殺害した。輝興は甥の池田光政にお預けとなり、備前福岡に屋敷（殿屋敷）を造り蟄居幽閉となった。2年後、37歳で没した。この間、警備や世話のため多くの武士・女性が詰め道路や井戸などが整備され現在に遺っている。



(9) 備前長船博物館

昭和58年に長船町に開館した全国にも稀な刀剣の常設展示館。備前刀の数々や刀装具、町内の埋蔵文化財資料などが展示してある。1階は埋蔵文化財展示室。2階は刀剣展示室。展示してある、長さ3.32m、重さ20kgの大太刀は長船派最後の刀匠第60代横山元之進好佑定が引退記念として、大正5年に作ったもの。当館の開館をきっかけとして、長船町には刀剣のふるさととしての気運が高まり、数名の刀工の手による鍛冶が始まった。現在全国には約400人の、岡山県には23人の刀工がいるという。

隣接の、今泉俊光記念館（備前長船民俗資料館）には県指定無形文化財・故今泉俊光刀匠の鍛冶道具や遺品を展示。また備前長船鍛刀場では伝統技術の保存と公開、後継者の育成を目的に毎月第1、3日曜日に古式鍛錬を公開している。

(10) 一文字派

備前国に栄えた刀工の流派として、一文字派・長船派の2大流派があった。一文字派は作刀の銘に「一」、または「一作者名、居住地、製作年紀」をきる。福岡一文字派は、始祖・則宗に始まり鎌倉時代初期から中期に福岡において、吉岡一文字派は鎌倉時代中期から南北朝時代にかけて吉岡（長船）に群居して作刀した。また、正中の頃興った正中一文字派は岩戸庄に居したので岩戸(いわど)一文字派の別称がある。

後鳥羽上皇の御番鍛冶刀工名

正月・則宗（備前）	2月・貞次（備中）	3月・延房（備前）
4月・国安（山城）	5月・恒次（備中）	6月・国友（山城）
7月・宗吉（備中）	8月・次家（備中）	9月・助宗（備前）
10月・行国（備前）	11月・助成（備前）	12月・助近（備前）

12人のうち7人が備前の刀工であり、正月の筆頭が第一人者、福岡一文字派の祖である則宗であった。則宗は名工としてたたえられ、刀茎(なかご)に菊花の彫刻を許されたので、菊一文字として珍重された。

(3) 福岡庄

岡山県邑久(おく)郡長船(おさふね)町福岡を中心とし、吉井川を挟んで岡山市の一部にまたがる地域は、中世は備前国上道郡に含まれ「福岡庄」と呼ばれた庄園があった。後年、吉井川の流れが変わり殆どは邑久郡となった。元は平氏の所領であったが、源平合戦の後は源頼朝により崇徳院法華堂領に寄進された。その後、変遷を経て正中2年(1325)に東寺の支配下に置かれたが、武士の台頭により支配は名目だけであり、地頭による年貢の横領が跡を断たず、領家の東寺によって地頭が罷免されることもあった。

東寺百合(びやくらう)文書にみられる福岡の庄

貞和2年(1346)東寺雜掌光信申状案の奥書によれば福岡庄は福岡村(福岡)、吉井村(吉井)、月岡(福岡)、本庄(寺山)八日市庭(八日市)から成り立っていた。

元弘3年(1333)の吉井村預所職請文によれば、請負年貢は120貫文であり、市場雜穀の納入をも請け負っていた。幕府は、備前守護・赤松則祐に地頭による年貢の横領を停止させようとしたが阻止できなかった。

(4) 一遍上人絵伝

【一遍】

時宗の開祖、一遍(1239-89)は伊予の河野氏の生まれであったが、承久の乱で朝廷方についたため没落した。10歳の時母と死別したのがきっかけで、出家し浄土宗に学ぶ。文永8年(1271)信濃善光寺に参籠。誘惑や恐れに負けず、一念に念仏すればだれでも極楽浄土に生まれかわれることを悟る。時々刻々と念仏をとこなえるところから時宗と呼ばれた。以後多くの人々に布教をするべく、「南無阿弥陀仏」と記した念仏札を配り歩いた。江刺(岩手)から大隅(鹿児島)まで15年間の遊行の中で25万枚もの念仏札を配ったという。

釈迦のごとく、全てのものを捨て去ることで往生できるとして、寺や弟子を持たず一人で布教（遊行）に出た。建治元年（1275）京都から伊予に帰り、弘安元年（1278）には厳島神社に詣でて、備前福岡で遊行した。翌年は京都から信濃善光寺へ向い、途中佐久郡の武士の館で初めて踊念仏を行った。踊念仏は今日の盆踊りの原形とも言われている。その後も遊行を重ね51歳で寂した。尾道の西郷寺は正慶年間（1332-34）遊行6代の一鎮上人の開祖といわれ、時宗寺院の特色をもつ建築である。

【一遍上人絵伝】

一遍の弟聖戒による「一遍聖絵」と、宗俊による「一遍上人縁起」（一遍上人絵詞伝）に分類できる。

「一遍聖絵」は全12巻。「六条道場絵伝」「六条縁起」「聖戒絵詞」ともいう。国宝として京都歎喜光寺に蔵。聖戒は一遍に随侍し、最初に法門をうけ京都に六条道場を開いた。12巻の奥書には、一遍の祥月命日の正安元年（1299）8月23日に聖戒が詞書を作ったことや絵師の名などが記してある。詞書は一遍の行状と教義を伝え、絵は13歳の一遍が修業に旅立つ場面から、入滅まで48段にわたり、諸国を遊行する生涯を描いている。風景画としても当時の社会を知る上で高い評価を得ている。

第4巻に福岡の市が「異時同図法」で描かれている。絵伝によれば一備前藤井（岡山市）において、吉備津神社の神主の子息の妻が夫の留守中一遍に帰依し、剃髪し出家した。それを知った夫が激怒し一遍を追って福岡の市において、太刀を抜きかからんとする。ところが、夫もまた一遍の威徳にうたれ、髻を切り、出家した—という。

「一遍上人縁起」は全10巻で、5巻以降は2代目上人・他阿弥陀仏（真教）の行状を描いている。嘉吉2年（1304）から徳治2年（1307）の間に成立した。

（5）備前福岡郷土館

室町時代から昭和初期の福岡における、生活用具・武具・医学書などを展示してある。地元の備前福岡史跡保存会が運営している。大正3年に建てられた洋風の旧平井病院を利用して作られた。木・土・日曜日開館。

(6) 教意山妙興寺

(黒田家墓所・宇喜多興家墓所)

開祖は権大僧都日伝上人。応永10年(1403)亡父の播磨守護・赤松則興の追善供養に創建された日蓮宗の寺院。本尊は三宝尊、脇士は四天王。永禄元年(1558)には檀徒により寺域を拡張し11坊を建立。

寛文6年(1666)池田光政の寺社整理により本坊ほか2坊となる。現在は本坊のみ残る。享保元年(1716)の火災で大半を消失、現在の本堂・客殿は安永3年(1774)に改築されたもの。

境内には、豊臣秀吉に仕えた軍師・黒田官兵衛の曾祖父高政と祖父重隆の墓及び、備前守護代・浦上氏の重臣であった宇喜多能家(よいえ)の嫡男興家(おきえ)の墓があると伝わるが、黒田氏は重隆が播磨へ移住したことから高政の墓のみと推測できる。天文3年(1534)宇喜多能家が島村豊後守の奇襲により自害した後、興家は嫡男直家を連れて駒へ逃れた。次いで福岡の豪商阿部善定にかくまわれ、善定の娘に晴家と忠家をもうけた。

忠家の次男は関ヶ原の戦い以前に宇喜多家を離れ、大阪夏の陣以後津和野城主となった板崎出羽守である。家康の孫娘千姫の九条家興入れをまとめたが、家康の遺言により桑名城主(後姫路城主)本多忠刻に再婚と決まったため、桑名に向かう千姫を奪おうとし発覚して自刃した。

豊臣家の五奉行のひとり、小西行長の実父は堺の商人であったが、阿部善定の手代の一人の養嗣子となった。その縁で、行長は一時宇喜多直家に仕えていた。

(7) 黒田氏と備前福岡

黒田氏は宇多源氏、近江佐々木氏の一族で京極満信の次男宗満が鎌倉末期に近江国伊香郡黒田荘(滋賀県伊香郡木之本町)に住み黒田氏を名乗った。高政のとき近江から備前福岡に移住したといわれる。重隆は備前から



〔教意山妙興寺〕



〔黒田家墓所〕



〔宇喜多興家墓所〕

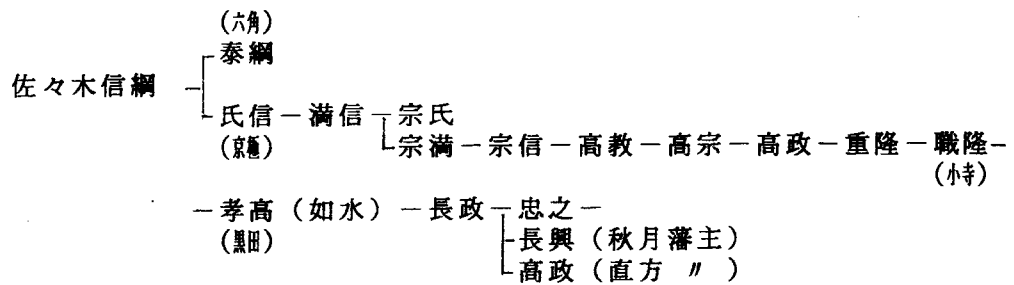


〔七つ井戸〕



〔一文字刀工跡の記念碑〕

播磨に移り、戰隆(もとたか)は守護赤松氏の一族で御着城主小寺政職(こでらまさもと)に仕え、姫路城を預かった。孝高(よしたか)は織田信長に通じ、天正5年(1577)中国制覇のため播磨に入った秀吉を姫路城に迎え、以後秀吉の軍師として従った。以後、備中高松城攻略、山崎の合戦、賤ヶ岳の戦いなどに参加。天正14年には九州征伐に従い、翌年その功により豊前6郡を与えられ中津城主となった。天正17年所領を嫡子長政に譲る。長政は関ヶ原の合戦の功により筑前一国を与えられ、孝高と長政は筑前福岡に移った。福岡の地名は、長政が祖先発祥の地・備前福岡にちなんで名付けたと言われる。

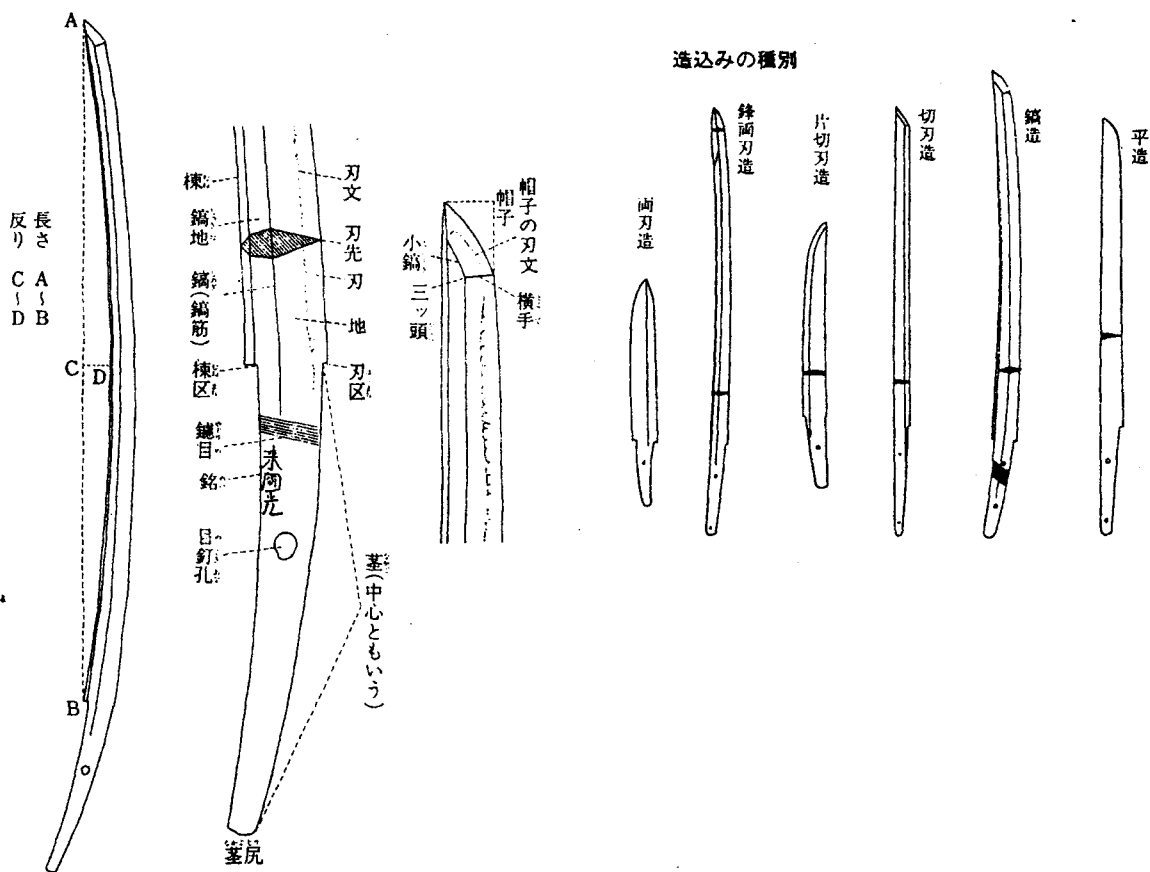


(8) 刀劍

刀劍は縄文末期に大陸から鉄器がもたらされて以来製作され、武器として、集団や社会への儀仗のためとして威力を発揮すべく、形や切れ味が整ってきた。中国山地は古代から良質の砂鉄(赤目鉄)と燃料の木炭が豊富であったことなどから、平安時代から鍛刀を続けてきた。平安末期から活躍した刀工の源流といわれる一派を「古備前派」と呼ぶ。古備前派の作として有名な名刀に「大包平(おおかひら)」がある。赤目鉄は折れず、曲がらず、切れ味のよい備前刀に欠かせない鉄と言われる。

鍛刀は原料の鉄を焼いてはたたいて伸ばし、又半分折り重ね鍛える。15回繰り返すうちに硬く折れにくくなるという。780℃に加熱した刀身を最後に水に入れ焼き入れする際、粘土におおわれていない刃の部分は急冷されより硬くなり、棟は粘土でおおうためゆっくり冷え軟らかく仕上がる。焼き入れの水温は、春分・秋分の頃が最も安定しているところから、3月と9月に作刀が集中した。また古備前派の技巧として、刃の先端に^{そり}をもたせることで、それまでの直刀に比べ馬上から敵に切りつけ易くなった。また、刃から棟へ流線形にする(鑄)ことで更に切れやすく折れにくくなった。そりと鑄(しのぎ)をもつ刀を鑄造湾刀(しのぎくりわんとう)と呼ぶ。

鎌倉初期、承久の乱を計った後鳥羽上皇は、全国から有名な刀匠を月ごとに都に招いて刀を作らせた。「御番鍛冶」では、12人中、10人までが備前と備中の刀匠だった。また、室町後期の長享2年(1488)には、備前守護代浦上氏の斡旋により長船の刀匠が数百人の工人と鉄を持って、近江に滞在していた將軍・足利義尚のもとで作刀した。現在、国宝や重要文化財に指定されている日本刀約800口(ふり)の半数は岡山県産である。



(1 1) 福岡一文字造劍之碑

中世、備前に栄えた作刀だったが、その技術は自分の子供かただ一人の弟子にだけ、口伝により受け継がれていった。(一子相伝)そのため、刀匠の不慮の死などで技術が途絶えることもあった。また、戦国末期に吉井川の大洪水により、長船の鍛冶集落は壊滅的な被害をこうむった。明治時代になると廃刀令により、刀工のほとんどは転業した。

元之進祐定(もとゆきすけさだ)は最後の刀工として生きぬき、長船鍛冶の伝統が消滅することを知り、自宅敷地内に大正14年に「造劍之古跡」(ぞうげんのこせき)と書いた大きな石碑を記念に建て、先祖の偉業を顕彰した。題字は昭和7年に総理大臣となった犬養毅による。

元之進祐定は明治20年に古鐘を長船鍛冶の菩提寺・慈眼院に寄進した。鐘は南北朝時代の作で築前国・筑紫宮にあったもの。

(1 2) 長船派

刀工の流派で鎌倉時代中期に開祖・光忠により興り、以後、室町末期まで一文字派と共に備前刀工の主流をなした。門流に名人、名工が多く長船物といえば名刀の代名詞となったほどである。鎌倉時代の名工には、長光・景光・真長が、南北朝時代には兼光・倫光・基光などが、室町時代には盛光・康光・則光・祐定らが活躍した。兼光は、当時福岡に滞在した足利尊

氏の求めに応じて一刀を作刀したが、その刀剣は鎧二領と兜を同時に断つほどであったといわれる。

室町時代初期の長船物には鎌倉時代に近い細身で反りの高い形となった。この時代は優れたものが多く、「応永備前」と呼び、以後の長船物は太刀が姿を消し63cm前後の打刀(うちがたな)が多く「末備前」と呼んでいる。注文打ちの作以外は崇高な美術品の価値はなくなった。応仁の乱以降の戦乱と、対明貿易の輸出品となり乱作されたためと思われる。

天明3年(1783)に記された「西遊記」(橋南谿・著)によれば

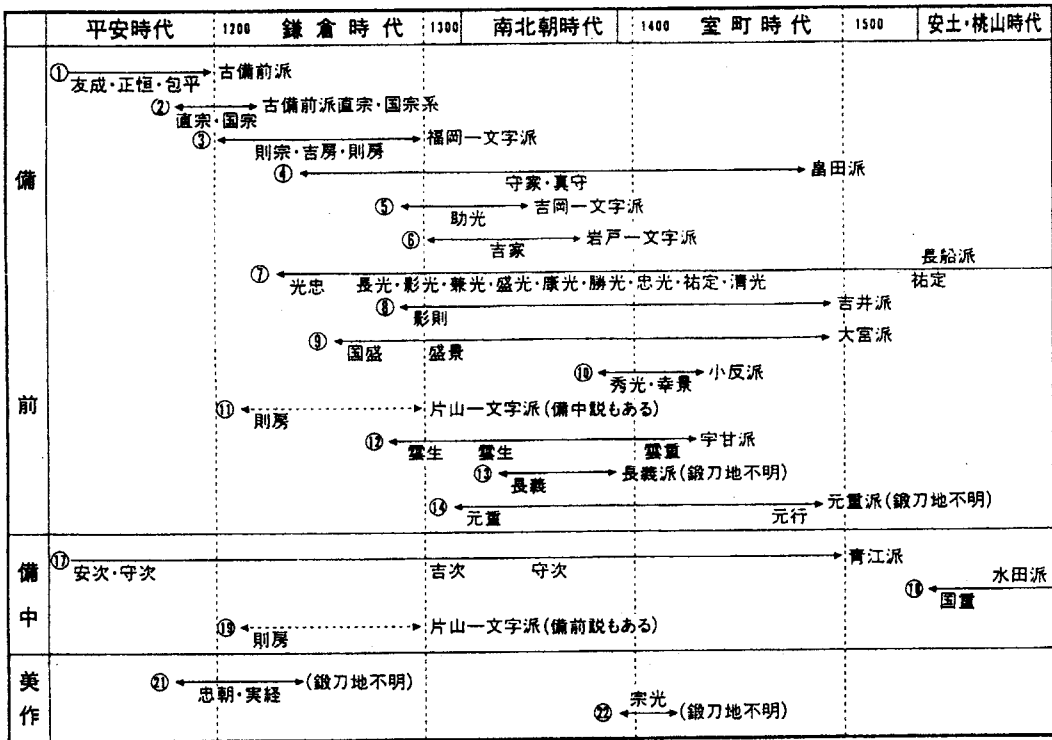
備前にては名高き長船の里に入りて、長光、祐定などいふ鍛冶の家を問ふ。其刀剣を鍛ふを見るに、他国の鍛冶に異りて、石を以て鉄を鍛ふ。何れの家も皆繁昌して賑なり。……とある。

江戸時代後期には作刀技術を生かした鉄砲鍛冶も行われた。

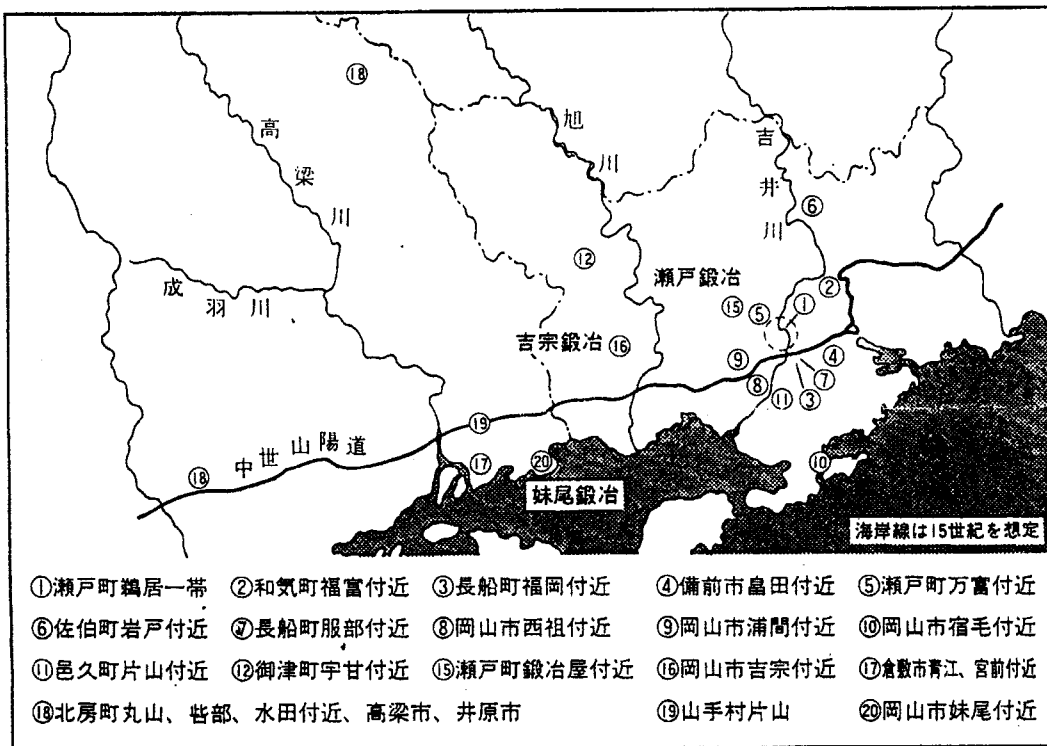
(13) 祐定

備前長船刀工の一派。初代は横山与三左衛門尉祐定。彼の作刀は豪壮雄健かつ実戦向きで、戦国武士に愛用された。以後、祐定を名乗る刀工が多く出る。江戸時代にも6代目、9代目の名工がでた。祐定一族ほど多くの刀工は他にいなかったし、作刀も全国一を誇っていたという。上野大掾祐定(こうずけだいにょうすけさだ)は正徳(しょうとく)4年に慈眼院の本堂を再建した。境内には彼の墓がある。元之進祐定が最後の刀工となった。(11)参照。

■岡山県下の刀の流派別制作年表



■岡山県内刀剣産地図



(13) 土師と花光寺山古墳・新庄天神山古墳

長船町には「土師〔はじ〕」という地名がある。ちょうど町役場の周辺だが、これは古代に土師部〔はじべ〕が居住していたことを示す地名といわれている。

「土師」は古くは「はにし」と発音したと考えられている。「はに」とは赤土のことで、土器製作に使われる土である。

この土で焼かれた素焼きの土器を土師器〔はじき〕という。つまり、「はにし」あるいは「はに」が「はじ」になり、さらに「はぜ」「はせ」などと音便変化していったのである。

土師部というのは、埴輪を中心とした土師器の製作と葬送に関わった集団（品部〔しなべ〕）のことで、これを管理した氏族〔うじぞく〕を土師氏〔はじうじ〕という。わかりやすく今風にいえば、同族経営の葬儀会社の社員が土師部で、取締役が土師氏ということだ。

土師部が大活躍したのは、何といっても古墳時代である。だから、「土師」の地名が残っている近辺には、古墳、それも比較的規模の大きな古墳があることが多い。

長船町土師の場合もこれにあてはまり、役場の北東約1.5kmのところに花光寺山〔けこうじやま〕古墳がある。古墳の所在地は「服部〔はつとり〕」といい、これも服部〔はつとりべ、織部〕に由来する古い地名と考えられる。

花光寺山古墳は全長110m、後円部径66m、高さ10m、前方部幅54m、高さ5.4mの前方後円墳である。

葺石があり、後円部には3重の円筒埴輪がめぐっている。

珍しいのは、後円部に石室を造らず、長持形石棺が直葬されていたことで、内部には男性の一体分の骨が残っていた。石棺の前後に小さな石室が付設されていて、北

側石室からは内行花文鏡1面、三角縁神獸鏡1面、環頭太刀、剣、槍、刀子〔とうす〕、銅鏃〔どうそく〕、鉄鏃〔てつそく〕、斧、鉈〔やりがんな〕、鋸〔のこぎり〕等多くの遺物



花光寺山古墳遠景（東から）

が出土し、築造時期は5世紀前半と推定されている。

さらに行政区画は備前市になるが、花光寺山古墳に接するように新庄天神山古墳が築かれている。

この古墳は全長120m、後円部径約50m、高さ9m、前方部幅約35m、高さ4mの前方後円墳である。やはり葺石と円筒埴輪列を有する。埋葬施設は竪穴式石室で、剣(く)り抜き式石棺が納められていた。変わっているのは、石棺の蓋(ふた)がなく、石室の天井石で代用していたことである。また、石棺の北側には精巧な石枕(せきしん)があった。

石枕のある石棺は香川県(石清尾山[いせおき]古墳群等)に多く、何らかの関係があったのかもしれない。

1947年(昭和22)に地元民が後円部を採掘したため、副葬品の全容については不明だが、棺内から石鏝(いしくし)、貝鏝、勾玉(まがたま)、管玉(くだたま)、鉄剣、鉄斧(てつお)、鉄鑑、鉄鎌等が出土した。築造時期は4世紀後半と推定されている。

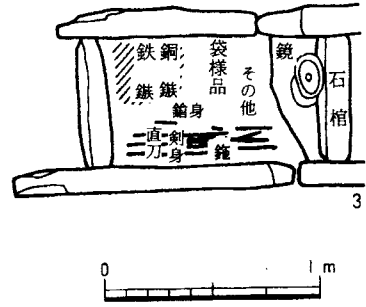
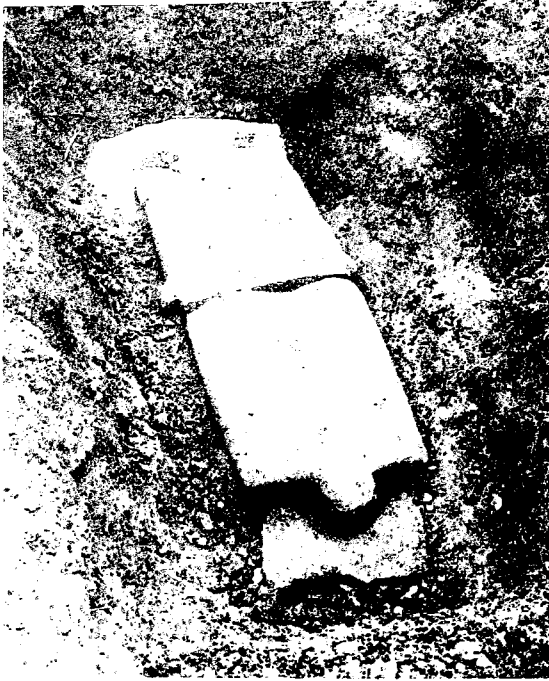
ともに、京都大学教授だったあの梅原末治氏が調査に関わり、報告書が出版されたため、比較的早くから全国的に知られていた古墳である。

さて、土師氏には何系統かあったらしく、奈良時代になると、それぞれが朝廷に改姓を願い出て許されている。それが菅原氏・大江(大枝)氏・秋篠(あきの)氏・百舌鳥(もづ、物集女)氏のいわゆる「土師の四腹」である。

したがって、有名な菅原道真や大江匡房(おおえのまさふさ)・大江広元(おおえのひろもと)は本来、土師氏なのである。大江季光(おおえのすえみつ)の末裔、わが毛利元就も土師氏ということになるが、ここまで下れば実感はないだろう。しかし、

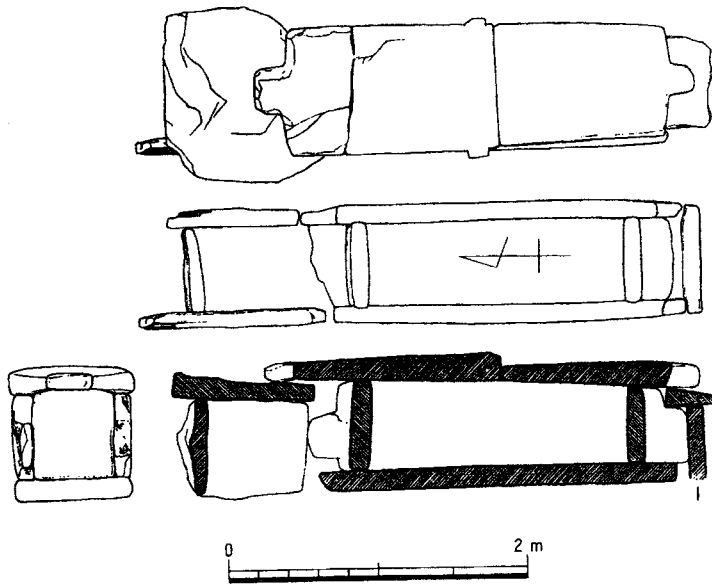


道路で分断された新庄天神山古墳(上)と花光寺山古墳



北側石室遺物位置図

花光寺山古墳長持形石棺出土状況



長持形石棺測量図

道真などは土師氏出身であることをはっきり自覚していたはずである。

一般に、土師氏の本拠地とされているのは次のとおりである。

一つは藤井寺市道明寺周辺で、誉田御廟山(にんだごひょうやま)古墳(「応神陵」)・市野山古墳(「允恭陵」)・岡ミサンザイ古墳(「仲哀陵」)などの古市古墳群を造った集団がいた場所である。いま行政区画としての「土師」の地名はないが、近鉄線の駅名や交差点の標識に「土師の里」が残っている。また、道真の叔母覚寿尼がいた道明寺は、以前、土師寺とよばれていた。

第二に、堺市百舌鳥本町・土師(どし)町周辺があげられる。大山古墳(「仁徳陵」)・上石津ミサンザイ古墳(「履中陵」)・田出井山古墳(「反正陵」)などの百舌鳥古墳群を造った集団のいたところである。百舌鳥赤畑町には百舌鳥八幡宮があるが、本来は土師氏の氏神であったと思われる。

その次に、奈良市秋篠町周辺と菅原町周辺があげられる。ここにいた集団は、五社神(ごし)古墳(「神功皇后陵」)・佐紀石塚山古墳(「成務陵」)・佐紀陵山(みささぎやま)古墳(「日葉酢媛陵」)・宝来山古墳(「垂仁陵」)など7基の大型前方後円墳を中心とする佐紀盾列(さきたたかみ)古墳群を築いた。

また、京都市大江は後に大江氏を名乗った土師氏の拠点だったようで、周辺に福西古墳群や香掛(くつか)古墳(「大江山陵」=桓武天皇の生母高野新笠の墓に治定)などがある。

ところで、長船町にいた土師部だが、彼らは「畿内」の本拠から派遣されてここに住み着いたのだろうか、それとも初めからずっとこの地域に住んでいたのだろうか。

全長100mを超えるほどの大きな古墳を造るには、高度な土木技術が必要である。したがって常識的には、そうした古墳を造り慣れていた「畿内」から土師部がやって来たと考えべきだろう。

しかし、長船町の土師部については、もともと地元にはいた可能性があるのではないだろうか。もちろん古墳が造られたこの場所にいたというわけではない。何故ならここに古墳が造られるかどうか分からないのだから。ここでいう地元とは、吉備出身という意味である。

何故そう考えるかという、第一に、大きな墳丘を築く技術はもともと吉備にあったということがあげられる。たとえば、弥生末期に築かれたの橋築(はつきの)遺跡は、その時代、日本最大の墳丘墓だった。双方中円形をした墳丘は、復元すれば全長80mにもおよぶ巨大なものだ。それに対し、同時期の「畿内」では大型の墳丘墓は造られていないのである。とにかく、

吉備には巨大な墓を造る技術が古墳時代以前からあったのだ。

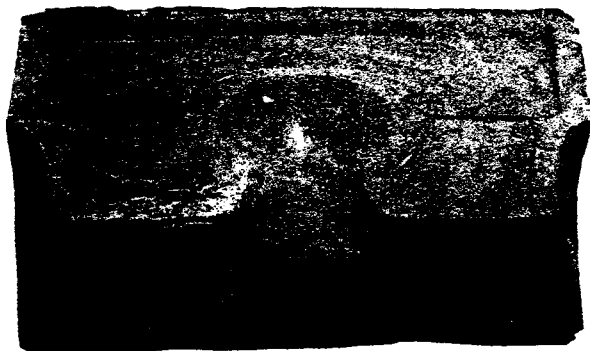
次に、円筒埴輪のルーツは吉備の特殊器台にあったということがあげられる。器台は壺など容器を載せる台のことで、通常は高さ20cm～30cmほどである。特殊器台はこれが大型化したもので、高さは1mに達し、祭祀専用に使われた。これがヤマトに持ち込まれて特殊器台形埴輪になり、さらに円筒埴輪へと発展するという事は定説になっている。円筒埴輪のルーツは吉備にあった。当然、特殊器台を焼いた連中がいたはずである。

さらに、長船町に隣接する備前市伊部(いべ)は、日本中世六古窯の一つ、備前焼の里として有名だが、釉薬(ゆうやく)をかけずに焼成する備前焼は、弥生土器の伝統を受け継ぐものである。そして忌部(いべ)もまた葬送に関わる集団なのである。備前焼の前身は長船町東須恵・西須恵で焼かれていた須恵器にルーツがあるといわれている。だからこの周辺には、土器作りを生業(なりか)とする集団が、古墳時代は当然のこととして、弥生時代から継続して住んでいたと推測できないだろうか。こうした人々が、花光寺山古墳や新庄天神山古墳を造る際に近くに集住し、築造作業をしたとは考えられないだろうか。

畿内に限らず、土器を作った人々や墓造りをした人々を各地で土師と呼んだのではないかと思う。そして、そうした連中がヤマト政権が成立した後、擬制的な同族関係を結んで、土師部あるいは土師氏になったと考えられるのである。

(14) 新庄天神山古墳出土石枕

備前市指定史跡の新庄天神山古墳から出土したもので、砂岩製の大形の石枕である。平面形は台形で、手前に少し傾斜している。上の面の周囲には、凸帯で縁を取り、中央部から手前にかけて、後頭部を受けるくぼみがある。横幅は一方で52cm、他方で45cm、縦41cmで、奥での高さ14cm、手前での高さ13.5cmを測る。



新庄天神山古墳出土石枕

1945年（昭和20）乱堀され、竪穴式石室のなかに長大な舟形木棺のような凝灰岩（砂岩）製の棺身が置かれ、幅広い法の一辺に沿って、水銀朱に染まった状態でこの石枕が発見されたという。石枕の上にはまさに首が置かれていたような状況で、周辺から勾玉1点を含む36点もの管玉が出土した。

舟形石棺等においては作り付けの石枕が発見される例が多いが、新庄天神山古墳から出土したものは分離型で、この形式では最も古い遺物の一つとして県の重要文化財に指定されている。

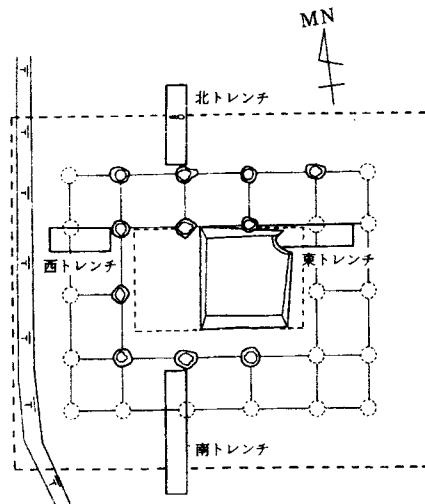
(15) 服部廃寺跡

邑久郡長船町服部の花光寺山古墳のある低丘陵西南麓の平地にある古代寺院跡である。

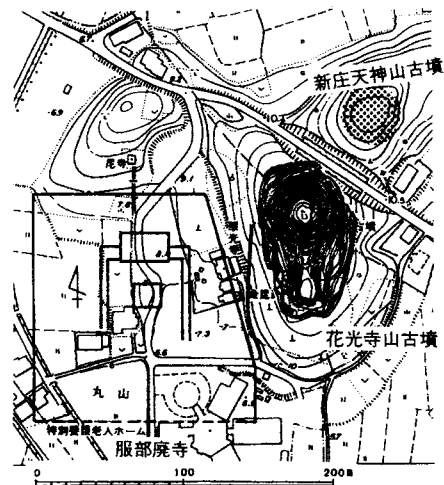
寺域のすぐ東に花光寺および花光寺山古墳がある。南方には広く長船町の平地（長船平野）を望む地点である。以前から、明確なものは不明だったが、基壇残痕（きんこん）とも思われる高みが一部にみられ、瓦片散布地の南にも方形微高地があり、須恵器片なども散布していたので廃寺の存在が知られていた。

1991年（平成3）、仮説道路工事中に礎石が発見され、長船町教育委員会が緊急発掘調査を実施した。その後、1992年から1996年（平成4～8）にかけて国庫補助事業として発掘調査が継続された。

出土瓦には、複弁蓮華文軒丸瓦（ふくべんれんげもんのかまるとがわり）、重弧文軒平瓦（じゅうこもんのかまるとがわり）があり、白鳳（はくほう）期建立の寺と推測されている。すなわち、7世紀末ころに中心伽藍である金堂と講堂が、ほぼ同時期に創建されたと考え



服部廃寺金堂平面図 (1/350)



服部廃寺跡周辺の遺跡 (1/5000)

られている。

この蓮華文に類似した瓦が、長船町本坊山出土として、東京国立博物館所蔵の切妻家形陶棺の妻に着けられていることは、服部廃寺のための瓦生産と陶棺の被葬者との関係の深さを示すものとして注目されている。

なお、いまの全部山花光寺は、文献などにより江戸時代中期、1722年（享保7）に現在地に再建されたことが分かっている。

(16) 鶴山丸山古墳

1956年（昭和31）国史跡。

備前市島田の丘陵最北端、鶴山山頂（標高61m）にある前期古墳である。埴輪や葺石がよく残っている。

1936年（昭和11）に墳頂に竪穴式石室（幅1.5m、長さ4m）があることが確認された。

石室は石英粗面岩の扁平な石材を小口にそろえて煉瓦状に4壁を築いている。しかし、持ち送りの構築手法は顕著ではなく、むしろ垂直に近い。

その中に特殊な家形石棺（幅1m、長さ4m）が納められているが、順序からすれば、石棺を安置し、その後石室の4壁を築いたことが判明している。棺蓋（かぶた）は一種の屋根形を呈し、両側面に特殊な薄肉彫りの装飾が施されている。

石棺の外側に仿製（ほうせい、日本製）銅鏡約30面をはじめ、碧玉製の四脚盤、小形の器台、小形広口丸底壺の写実的な石製模造品、合子（ごうし）、埴塙（はつば）、勾玉（まがたま）、刀剣、鎌（やじり）、斧などが置かれていたという。また、遺物のうち中国製の三角縁唐草文二神二獣鏡1面や車輪石は棺内から取り出されたものであるという。

なお、報告書に梅原末治「備前和気郡鶴山丸山古墳」（『日本古文化研究所報告』9 1938年〔昭和13〕）がある。

(17) 須恵古代館

長船町東須恵・石須恵の地は築山古墳に代表されるように多くの古墳の



鶴山丸山古墳遠景

ほか、地名の由来となった須恵器窯跡など多くの史跡が存在する。須恵古代館ではそうした遺跡からの出土品を展示している。

現在、地元のボランティアによって管理運営が行われている。



築山古墳墳丘測量図 (1/800)

(18) 築山古墳

1959年(昭和34)岡山県指定史跡。

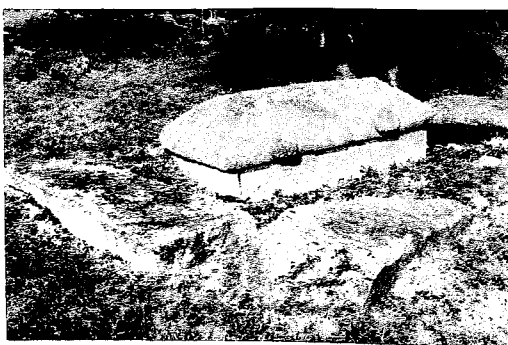
邑久郡長船町西須恵の北面した傾斜地に築かれた前方後円墳である。

墳輪をめぐらしていたことで知られ、全長約90m、前方部が発達した形態を示し、後円部上には竪穴式石室に納められていたとみられる家形石棺が露出している。古く出土した副葬品の一部は東京国立博物館に収蔵されているが、そのうちの馬具類などは、この古墳が5世紀後半に中心をおく古墳時代中期の終わりごろの年代であることを示している。

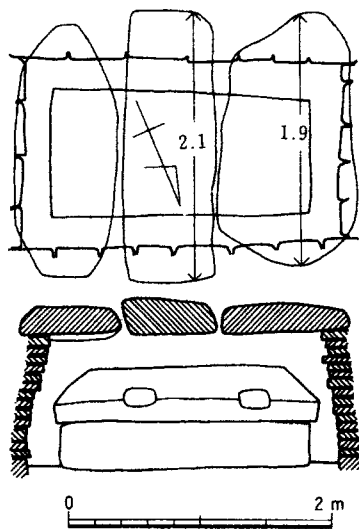
石棺は家形としては古式で、大阪府と奈良県の境にある二上山で産出したピンク色を呈する凝灰岩製で、はるばる畿内から運ばれたものである。この種石材による石棺は古式の家形石棺に限られ、しかも大和・河内などでの8~9例の外は、近江1例とこの築山例だけであり、5世紀末から6世紀初頭にかけて畿内の大王権をめぐる勢力消長と、それに対応した吉備地方豪族の動向を示す重要な古墳である。



築山古墳全景



築山古墳家形石棺



築山古墳石室復元図(1/50)

(19) 備前南大窯跡

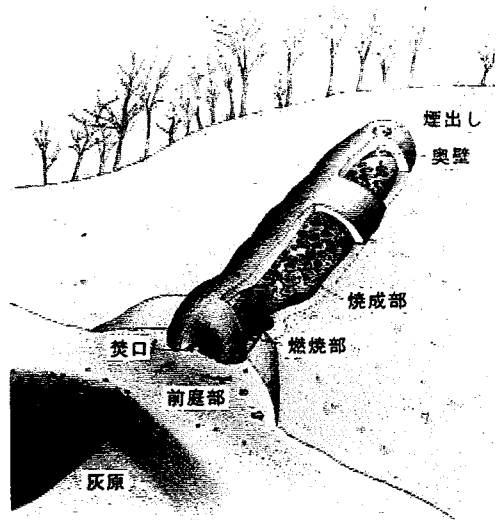
1959年(昭和34)国指定史跡。備前市伊部(いべ)、JR赤穂線伊部駅の南側山麓にある備前焼の窯跡のうち、最も東にある全長約54mの最大の半地上式登り窯を指す。普通この最大の窯を東窯といい、これより西方にやや小さい中窯、西窯がある。南大窯跡は、本体の部分が凹部をなし、窯壁の部分は部分的に高く残されている。



備前(伊部)南大窯跡の碑

この窯の東と西には灰原があり、東にあるのは東窯の灰原であるが、西のものは東窯と中窯の両方の灰原と考えられる。大窯は細長い形だが、中央部に広がりがある。また、窯底の傾斜は、上部がやや緩やかで、下部は急になる傾向が認められる。

この窯の最も高い部分に煙出し装置がある。つまり奥壁の下部中央にほぼ四角形の煙だし穴が開けられるとともに、左右の下部、中央煙出し上部にも小形土管の煙出し2個などが存在している。この南大窯は備前焼の同業者が共同して使用した大窯であり、江戸時代に使用されたものとされているが、その使用下限は明治時代にまで下がるようである。



登り窯の構造

(20) 備前焼

岡山県を代表する陶器。いわゆる日本中世六古窯の一つで、丹波焼・信楽焼・瀬戸焼・常滑焼・越前焼とともに全国的に有名である。

邑久郡の須恵器の伝統を受けて12世紀に焼き始められ、約800年間一貫してほとんど焼きしめ陶器だけを生産し続けた。ただし、江戸時代から大正時代にかけて一部で白備前、色絵備前、絵備前などが焼かれたことがある。



本来、壺・すり鉢・甕(かめ)などの備前焼四耳壺(「文明十二年」銘)雑器を大量に生産する窯であったが、室町末期にその渋さが堺・京都の茶人に認められ、以来、建水・水差・花生・茶入などの茶陶も焼くようになる。

備前焼は伊部焼とも呼ばれるが、これは生産地を国名と村名でいっているだけの違いであって全く同じ意味である。また、精製されていない粗い胎土(たんど)の作品を備前手、水簾(すいひ)された細かい胎土による塗り土の作品を伊部手と区別して呼ぶ場合もある。同様に古備前、古伊部は同義語で、江戸時代初期以前のものをこう呼ぶ。

古備前の歴史は、ふつう以下のⅠ期～Ⅴ期に分けられる。

Ⅰ期（平安末期～鎌倉初期）…還元焰焼成による燻(くす)べ焼き、窯は山麓

Ⅱ期（鎌倉中期）…燻べ焼きないし中性焰焼成、窯は山麓から中腹

Ⅲ期（鎌倉後期）…酸化焰焼成への発展期、窯は中腹から高地

Ⅳ期（南北朝～室町）…大窯への胎動期、窯は山麓

Ⅴ期（室町末期～江戸初期）…大窯生産、窯は山麓

その後も江戸時代前期・中期・後期・明治・大正から第2次世界大戦・戦後というふうに分けて、その器形、作風の変遷をみることができる。原料土はⅢ期までは山土単味で、Ⅳ期後半ごろから田土が加えられ、江戸期以降は礫上土(いそのかみつち)も使用された。

成形は中世の間、紐(ひも)作りののちロクロ仕上げが行われていたが、小物に限りロクロ水挽(ひ)き成形を行っている。窯の構造は、初期には須恵器の窯と同じ地下式（または半地下式）のいわゆる穴窯（窖窯[あながま]）であったが、時代とともに規模が大きくなり、Ⅳ期ころから半地下式（または半地上式）の大窯へと発展し、江戸時代末期以降は地上式の連房式登り窯に変わっていく。備前焼の窯跡は備前市伊部の地に5km四方の範囲で集中し、著名な窯跡としては古い順に大明神窯跡、合ヶ淵窯跡、グイビ谷窯跡、不老山トンネル東西窯跡、南・北・西大窯跡、天保窯跡などがある。

また、備前焼の出土地は各地にまたがっているが、中でも草戸千軒町遺跡（福山市）、尾道中世遺跡（尾道市）、鹿久居(かくい)千軒遺跡（岡山県和气郡日生[ひなせ]町）などの中世の生活跡から発見されたすり鉢や大甕の完品・破片は大量で、当時の販売規模の大きさをうかがわせる。

(21) 真光寺

備前市西片上宇寺脇にある真言宗の寺院。山号は御滝山(おたきさん)。寺伝によると、737年（天平9）聖武天皇の勅命により報恩大師が備前四十八ヶ寺を創建したとき、その一つに加えられたという。応永年間（1394～1428）、堂塔の廃滅を憂えた良宗が新たに堂塔4、僧舎13坊を建

てて再興した。その後再び堂宇が壊れたので1516年（永承13）承円によって修復された。

元龜・天正（1570～1592）のころ、兵火により僧舎6坊を失った。また、山号は初め小滝山（おたきさん）と称していたが、慶長年間（1596～1615）に勢恵上人が京都の御室（おむろ）にある真言宗の大本山仁和寺（にんなじ）から「御室（おむろ）」の「御」の字をもらい、御滝山（おたきさん）と改称した。

境内には、本堂、三重塔（以上国重要文化財）、仁王門・鐘楼堂・鎮守堂・僧舎などの建物がある。僧舎は7院（心王院・平等院・自性院・華（花）蔵院・西福院・成就院・松寿院）があつたが、明治維新のころ3院となり、さらに1院を失って現在は自性院・華蔵（花）院の2院となっている。

(22) 真光寺本堂

1953年（昭和28）国指定重要文化財。備前市西片上の真光寺にある中世寺院建築である。

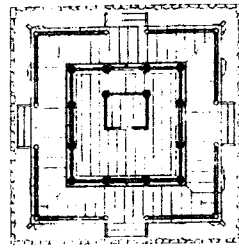
桁行5間、梁間5間、一重、単層入母屋造、本瓦葺。正面中央に葺き下ろしの1間向拝（こうはい、拝み所）を付す。軒は二重繁檼（しげだるき）。柱は円柱、斗拱（ときょう）は出三斗（でみつど）。中備（なかぞなえ）はだいたい簀束（すいすく）を立てるが、側面中央は双斗花肘木（ふたつどはなひじき）、正面は雲龍の彫刻を入れた臺股（かえるまた）となっている。ただし、この臺股は桃山時代の後補だろう。頭貫（かしらぬき）もまた禪宗様木鼻（しばな）とする。柱間の建具は正面5間両開棧唐戸（さんからど）を並べ、側面第1間も棧唐戸、2間目は引違舞良戸（ひきちがいまいらど）を並べ、側面



真光寺本堂

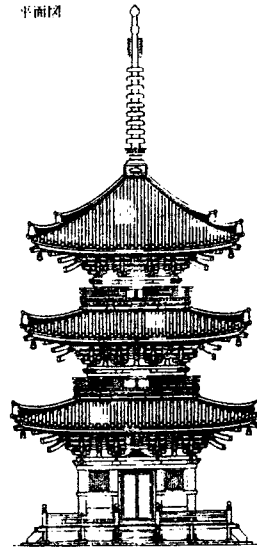


真光寺三層塔

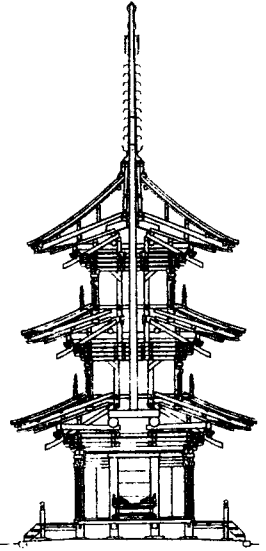


真光寺三層塔

平面圖



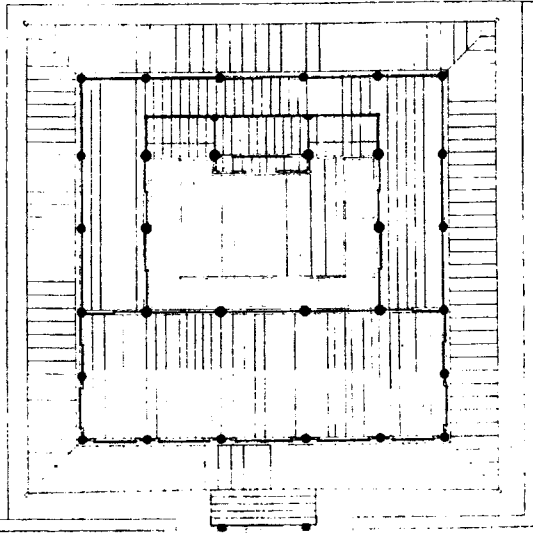
正面圖



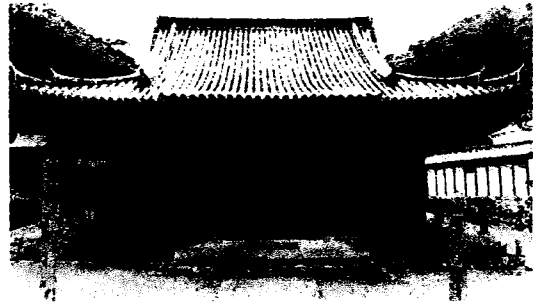
斷面圖

0 3m

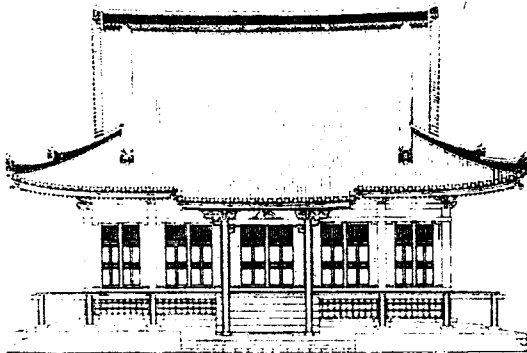
真光寺本堂



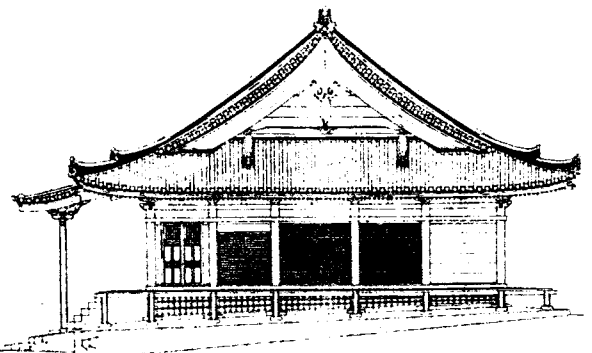
平面圖



真光寺本堂



正面圖



側面圖

0 5m

第1間も棧唐戸、2間目は引違舞良戸、3、4間目は蔀戸(しとみど)、5間目は板壁である。なお、腰回りには板縁をめぐらしている。

内部は前方2間通しが外陣、後方は両側1間通しが脇間で、中央の方3間分が内陣である。内陣、外陣ともに拭板敷(ぬぐいいたじま)。境は菱格子欄間(ひしうしらんま)と蔀をはめ、脇間との間も引違舞唐戸で分かつ。外陣の上方は型のように化粧屋根裏に紅梁(こうりょう)を懸け、内陣には竿縁天井(さおぶちてんじょう)を張り、金箔押(きんぱくおし)の来迎柱の前に禅宗様の仏壇と厨子を設けるが、ことに厨子は桃山時代の特色がみられる。

この建築の基調是和様であるが、それに禅宗様を多分に折衷した、いわゆる新和様に属する。そして外見の大部分は棟札にいう1516年(永正13)ころの室町時代後期の様式で、部分的に近世の後補部分をみるが、1962～1964年(昭和37～39)の修理による古材の発見と寺伝などにより、この本堂は応永年間(1394～1428)再建の三間堂を1516年に五間堂へ拡張し、さらに桃山・江戸時代の修理が加わったものと判断されるに至った。

なお、1962年(昭和30)の解体修理の際、「奉造立小瀬山真光寺本堂上棟 干時永正十三年(1516)丙子十一月十六日 大工藤原家次 大法師承円敬白」と書かれた棟札が発見された。

(23) 真光寺三重塔

1953年(昭和28)国指定重要文化財。備前市西片上の真光寺にある中世寺院建築である。

屋根は本瓦葺、初重軸部は擬宝珠勾欄(ぎぼしうらん)付きの縁をめぐらし、方3間、各面の柱間は中央に板唐戸を閉じ、左右に連子窓(れんじまど)を配している。柱は円柱で、軒は二重繁檼。柱上の斗拱は三手先を組み、軒天井、蛇腹支輪(じやばらしりん)を設ける。斗拱の間の中備として中央には墓股、左右の間には簀束を置く。また頭貫の先を木鼻に造っている。

このような絵様によく時代の特徴がとらえられる。ことに四方の墓股は各種の花唐草をほぼ左右対象にあしらい、その中央に円相を置いて内に金剛界四仏の種子(しゆじ)を1字ずつを配し、これらを精巧な透かし彫りとしている。2層目は中備はすべて間斗束(けんとうか)である。3層目は各面中央にだけ間斗束を立てるが、これは上にいくほど塔身幅が遡減(いげん)するための処置である。初重内部は拭板敷となっている。やや後方寄りに来迎壁を立て

て、前に後補の仏壇を設け、八木浄慶の造る蠟石(ろうせき)製大日如来座像を安置する。慶長年間(1596~1615)に呂久郡牛窓の蓮華頂寺から移築したものであるが、様式上、室町時代後期の建立と思われる。1966年(昭和41)に解体修理を完了した。



真光寺三重塔

(24) 備前四十八カ寺

備前の古刹として重んじられた48の寺院である。

1638年(天和3)の『金山寺縁起』には、同寺開山報恩大師が75

2年(天平勝宝4)に孝謙天皇の病気の加持を行い、全快の後に勅許を得て備前国内に千手観音を本尊とする四十八カ寺を建立、金山寺(岡山市金山寺)をその惣本寺としたとある。『吉備温故秘録』(寛政年中編纂)、『備陽記』(享保6年編纂)など近世の諸書も同様の説を記しているが、史実は明らかではない。四十八カ寺のおのおのについても、諸書によって必ずしも一定しない。それらを書き上げられた現存する資料では1595年(文禄4)の「備前国四拾八ヶ寺領并分国中大社領目録」(『金山寺文書』)が最も古く、同目録によって四十八カ寺をすべてあげると次のとおりである。

◎御野郡…金山寺・岡山寺・石井寺

◎津高郡…円城寺・藤田山(成就寺)・菅野山(妙福寺)

◎赤坂郡…石井原山(千光寺)・大松山(妙覚寺)・正満寺・菖蒲谷山(西光寺)・杳石山(高福寺)・笠寺山(浄土寺)・幡寺山(極楽寺)・上地山(満願寺)

◎磐梨郡…中津寺・元恩寺・石蓮寺

◎和気郡…真光寺・正楽寺・小幡山(長法寺)・大滝山(福正寺)・満願寺・安養寺・杉沢山(長楽寺)・市倉山(空城寺)

◎邑久郡…鯛山寺(善興寺)・南谷寺(長楽寺)・真徳寺(明王寺)・今寺山(大聖寺)・上寺山(余慶寺)・大賀島山(大賀島寺)・横尾山(静円寺)・庄田寺(朝日寺)・薬王寺・千手寺(弘法寺)・牛窓山(金剛頂寺)

◎上道郡…瓶井山(禅光寺)・沢田寺(温徳寺)・今谷寺(長楽寺)・岩間寺(西明寺)・築地山(常楽寺)・脇田山(安養寺)・広谷山(妙法寺)・宝山寺(満願寺)・馬路山(明王寺)・西大寺・塚原山(西明寺)・湯迫山(浄土寺)

なお、()内は『吉備温故秘録』に注記された寺院名であり、江戸中期にはこれらの寺のうち10カ寺は退転した。1カ寺は日蓮宗、残り37カ寺のうち18カ寺が天台宗、19カ寺が真言宗であった。

(25) 報恩大師

?年~795年(?~延暦14)。奈良時代の法相宗(ほっそうじゅう)の修験者の僧侶で、吉野の金峰山(きんぶせん)の実質的な開創者である。

備前国津高郡波可(現岡山市芳賀)に生まれたという(生地は奈良県との伝承もある)。15歳に日応寺(岡山市日応寺)に入り出家、その後、

30歳で吉野山に入山。延命・滅罪・除病の功德をもつ千手観音の修法(すぢり)を修めたという。752年(天平勝宝4)、孝謙天皇の病氣加持祈祷を行い、また桓武天皇が長岡京で重病にかかったときも観音呪(かんのんじゆ)を唱えて平癒させ、報恩大師の名と官禄を賜ったと伝えられる。

『金山寺文書』『清水寺文書』『本朝神仙伝』『元亨釈書(げんこうしゃくしょ)』などの記録からみて、正式に仏教を学んだ僧というより、山林で修業する山伏の性格をもった行者といえよう。岡山地方での布教活動は広範囲であったらしく、備前四十八カ寺を建立したと伝えられ、金山寺(岡山市金山寺)、千手山弘法寺(邑久郡牛窓町)、瑜伽山(ゆがさん、倉敷市児島)など備前・備中の古刹のほとんどの縁起に、開基や中興の祖として報恩大師の名が記されている。大和国では760年(天平宝字4)、十一面観音を本尊とする子島寺(こしま、奈良県高取町)開いている。没地は子島寺とも千手山弘法寺の永倉山ともいわれているが、不明である。現在、永倉山山頂には玉垣に囲まれた供養塔が残っている。

なお、弟子は京都清水寺開祖の延鎮(えんちん)など多数いる。

9月例会「備前長船・福岡の古代中世を訪ねる」

企画 備前史探訪の会 歴史民俗研究部会

〒720-0821 福山市東川口町4-1-39

TEL0849-54-2047

資料作成・文責

No.(1)~(13) 種本実

No.(13)~(25) 平田恵彦

2000年(平成12)9月17日(日)実施

